「省 察」

習志野市立第四中学校長　鳥飼（とりかい） 一哉（かずや）

「私の教師道」というテーマで原稿依頼を受けた時に、私が校長として何ができているのか自問自答にかられた。常に緊張感を持ち、毎日心配ばかりして今が一番教師生活の中で委縮しているのではないかと感じる。一日を終え帰宅するとホッとする。しかし寝ていても心休まる気がしない。責任の重さを肌で感じ、一つの学校を守っていく使命は重責であることを痛感している。老子が「天に棄物無し」と説いたように、天はなぜ自分をこの世に生み出し、何をさせようとするのか。自分はすでに天から生じたものであるから、必ず天から命ぜられた役目があるはずである。その役を謹んで果たさなければ、必ず天罰を受けるであろうと自分を省察すると、自分のしてきたことは、今の自分に降りかかり、罰が当たっているかのようである。

私が教師になった理由は、なるべくしてなったとしか言いようがない。私の両親と三つ上の兄が教師で、祖母は事務職員として勤めていた。私の記憶では物心がついた頃から、親の勤務校内を闊歩し周囲の先生方にかわいがられ、生意気を言っていた。そして、思春期の第二次反抗期頃から本来の自立願望が反抗行動として現れた。親の職業柄、「鳥飼先生の息子」と評価され、期待されたり、何かを任されたり、兄と勉強を比べられたりすることが嫌で仕方なかった。何のために、誰のためにやらなければならないのか、教師目線で理想を説く親のために頑張ることが嫌になり、勉強をしないこと、非行に走ることが親からの逃げ道、親への反抗と考え、坂道を加速しながら下り続けた。母親を泣かせるような時期もあった。中学校時代の愚連隊仲間は今では会社の経営者や上席であり、真面目な社会人として人生の後半を迎えている。そんな仲間は私が今の仕事をやり遂げていることを驚いている。

それでもなぜ教師になったのか。いろいろ失敗もしたが、親から見捨てられなかった。本気で支えられたと今では感謝しかない。父は九州男児、厳格で真面目、悪ふざけが通じないところがある。幼いころは平手で殴られたことも幾度か、夜中に雨戸を開けて庭に放り出されたこともあった。中学高校時代の私は何度も問題行動を起こし、その都度、親が私のことで謝罪を繰り返していた。ある問題を起こしたとき、自分は羽目を外しすぎ「人生終わった」と覚悟した。その時父は、一言も怒らず、被害者様に何日も私と一緒に土下座してくれた姿は今でも目に焼き付いている。父が退職願を準備したことは後に母から知らされた。問題を起こし、猛省してもまた繰り返し、何度も戒めてくれた学校の先生方も私を見捨てることはしなかった。今ではそんな

先生方一人一人が私の恩人であり、謝罪と感謝の気持ちしかない。

私は、迷走しながらも、野球を小学校から大学卒業まで辞めずに続けてきた。厳しいけど大好きだった野球は私の財産だった。集団でもまれ、世の中の理不尽さや条理が少し分かってきた頃、いよいよ大人へ向かって人生を真面目にスタートしようと思い始めた。高校３年生の頃には、将来何になろうか、そのために大学に進まなければと考えるようになった。私の知っている職業は、教師しかなかった。これまで育ててくれたのも、関わってくださった先生方がいたからだと感謝と共に教師の仕事に魅力を感じていた。勉強は劣るが、運動は自信があったので体育教師を目指した。大学卒業まで続けてきた野球を通じて厳しさと勝つ喜びを経験させたいと思った。自分の失敗経験も生かして生徒指導の世直し先生くらいの意気込みだった。高校時代の恩師が私を大学で寮生活させることを決めていた。これが私の大人へのターニングポイントだったように思う。甘えていた地元と親元から離れたことが自身を更生させることになった。大学４年間の寮生活では、毎晩のように１年生全員屋上に集合がかかったが、ここは絶対に逃げてはならない、歯を食いしばっての２年間だった。お手本にする先生は身近にいたが、親の真似はできない、俺流の教師になろうと心に誓った。

教育基本法の第１条「教育は、人格の完成を目指し、…」私が目指した教育は人間教育、人間形成だと自負している。自分もそうであったように、多くの経験をして失敗を繰り返し、時には成功して、その年齢で何が正しく何が間違っているのかを判断できる力をつけていくことである。子供の人格を教師は作れない。人格は自分で形成していくものである。そのプロセスとなる経験を手助けし、支えていくことが教師の役割である。様々な経験を自分作りの糧にさせたい。私でなければ支えられない、私と出会えて救われたと思われる子供も何人かいた。そんな子供との付き合いは長くなり、もしかすると恩師と呼んでくれているかもしれない。そして、私は人生の恩返しのために校長になった。叱れない親、叱れない教師、叱られない社会の中で子供たちはどうやって正解を見出すのだろう。ならぬものはならぬと指導することで、世の中の厳しさも知らせたい。

本校では、創立以来 50 年、『四中魂』という言葉が四中生の目指す生徒像として受け継がれてきた。

「学習・行事・部活動に燃える心」、
「勤労をいとわず進んで奉仕する心」、
「礼儀を重んじ感謝する心」この三つの心は本校にとっての不易であり、そして『四中魂』は、在学中だけのものではなく、生涯にわたってとても大切な人生の指標だと指導している。

冒頭で私事を述べたが、教職員には委縮してもらいたくない。情熱を持って思う存分に教鞭を振るってもらいたい。若い頃の私が夢中になって生徒と向き合っていたように。その時の校長は私を応援してくれていた。今、教育に対する社会の目や保護者の目も厳しい折、信用失墜行為の根絶、コンプライアンスを醸成し、信頼と信用のもとに自分の持っている力を精一杯子供のために発揮してもらいたい。その応援団長を私が担う。与えられた職責を、子供たちの成長のために全職員を束ね、組織として生き生きとした教育を実践し、生徒が、教師が、地域が元気な学校づくりをこれからも果たしていく。

本納中学校区の小中一貫教育を目指して

茂原市立新治小学校教頭　平野（ひらの）　恭子（きょうこ）

１　はじめに

新治小学区は、茂原市にある四方を山に囲まれた自然豊かな農村地帯である。子供の数は年々減少傾向にあり、現在、児童数37名の小規模校である。

新治小のある本納中学校区の１中学校・３小学校では、現在、小中一貫教育を目指した取組を行っている。この取組を行う中で、私は全教職員が「夢」をもって子供たちのために教育活動ができるよう、教頭は見通しを持って人と人、人と物をつなげることが大切であると考え日々業務に臨んでいる。

２　本校の特色

本校は、家庭や地域と協働した地域学習を推進している。温かい雰囲気の中で活動が行われ、地域全体で新治小の子供たちを育てている。まさに、「社会に開かれた教育課程」につながる活動である。

⑴ツバメ営巣調査

平成７年度に千葉県から「環境学習モデル校」の指定を受け、活動がスタートした。その中のツバメ営巣調査は今年で19年目になり、毎年５月と６月に３年生以上の子供たちが、地区別に分かれて営巣調査をしている。

今年もツバメが来ているか等、地域のお宅に伺い話を聞き、巣を見せていただいた。地域の人たちは、毎年子供たちが営巣調査に来るのを楽しみにしている。また、ツバメ保護の一環として年２回通学路のクリーン大作戦を行っている。７月にはツバメ調査報告会を行い、地域・保護者・野鳥研究者・自然保護ボランティア団体の方々に発表した。今年度は新しい試みとして、これらの活動を本納小の子供たちと合同で行った。このような活動を通して、子供たちは命の大切さを学ぶとともに、郷土愛も育まれると考える。

⑵もちつき集会

もちつき体験を地域の方々と行った後、参加者全員で餅や豚汁を食べる。また、餅は地域のお年寄りにも手紙を添えて配っている。この活動は、保護者・社会福祉協議会・青少年育成会の方々等の御協力のもと行っている。これらの体験活動で多くの方と関わりを持つことによって、子供たちの視野を広げコミュニケーション能力を育むことができると考える。

３　小中一貫教育を目指した取組

今年度より、本納小学校と２校合同研究を始めた。研究主題を「効果的な小学校連携のための、組織的な取り組みのあり方」、副題を～豊かな人間関係づくり～とした。

⑴意図的な交流の場の設定

交流授業は３年目となる。今年度は、実態調査を実施した上で変容を見取っている。手立ての一つとして年度当初に両校で自己紹介カードを作成した後、交換し掲示している。また、各学年の校外学習、合同授業を行うとともに、授業参観を合同で行う取組も始めた。

ツバメ調査や報告会の合同実施もこの取組の一つである。子供たちの実態を把握し行うことで、毎回、成果と課題が明確になり、実践上の手立ての精選を図ることができている。また、子供たちも自分自身の成長と努力点を実感している。

⑵計画的、効果的な研究推進

三つの部会に分かれ、教育活動を推進するための事項についての取組を持ち寄り、定期的に話し合いを進めている。

①教育課程・学習指導部会
時間割や学校行事の精選、ノートの使い方、掲示物の統一等

②生徒指導・特別支援部会
共通理解すべき事項、子供の実態の共有、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成等

③体育・保健指導部会
体育・保健年間指導計画、保健指導、業間体育の取組、体育授業の進め方等

⑶合同研修会

夏休み中に外部講師を招聘して２回の合同研修会を行った。内容は、特別支援教育についてと小中一貫教育先進校の取組についてである。日頃の教育活動を振り返り指導法の改善につながった。また、グループワークの中で先進校の実務的な内容について対話をすることで、より理解が深まるとともに、研究の方向性が明確になった。これによって、これからの研究の見通しを持つことができた。

⑷合同懇親会

中学校を含め３校合同で懇親会を行い、教職員間の効果的な交流の場の設定をした。とても和やかな雰囲気の中で行われ、親睦を図ることができた。教職員の信頼関係を深めることが、子供たちが安心して多人数の中で活動を行うための基盤になると確信した。

４　今後の取組

⑴目指す子供像の作成

現在、本納中学校区の小中一貫教育を目指してグランドデザインづくりを行っている。知・徳・体と「郷土愛」をバランスよく育成することを目標として、本納地区の子供たちの良さと課題を共通理解した上で、「15 歳の目指す姿」を作成した。

今後、４校の実務者が担当ごとに集まり、「15 歳の目指す姿」を実現するためのグランドデザインづくりを進めていく。

⑵本校の特色から「開かれた教育課程」へ

前述の本校の特色で、「『社会に開かれた教育課程』につながる活動である。」と述べた。これらを実現するためには、まず、「全教職員が一丸となって取り組もう」という環境や意識づくりをすることが必要である。そのためには、教頭が率先して教職員に問いかけ、明るい前向きな雰囲気づくりをすることが大切だと考えている。

そして、教務主任を中心にして、カリキュラム・マネジメントを行っていくことへの指導助言をするとともに、保護者や地域に「開かれた教育課程」について分かりやすく発信していきたい。

５　おわりに

ここまで、本納地区の小中一貫教育を目指した取組について概要を述べてきた。この取組は始まったばかりであるが、昨年まで積み上げてきたものを生かしながら広げ深めることができるよう人と人、人と物をつなげていきたい。そのために、新任教頭研修の中で学んだことを実践できていたかどうか常に振り返ることを大切にしたい。そして、校長の指導の下、教頭として「希望の登校・満足の下校」と児童・教職員が共に感じられる学校づくりを目指して努力していきたい。

不易流行　～「チーム学校」の実践を目指して～

山武市立大平小学校教諭　佐藤（さとう）　剛（たけし）

１　はじめに

小規模校の本校は、教職員の多くが若手や中堅で活気がある。私は教務主任として８年目を迎え、本校では２年目を迎えた。教務主任の役割は学校教育法施行規則第44条に示されているとおりであるが、それ以外にも多岐にわたり、やりがいのある分掌である。

２　教務主任として学校を動かす

教務主任は、校長が示す学校教育目標の具現化を図るために、率先して行動できるポジションである。それが自身に与えられた使命であり、最大の仕事と捉えている。以下に本校の課題を踏まえた取組の一部を紹介する。

⑴授業改善のための時間の確保

担任の授業改善や授業力向上は急務である。そのためには「時間を作る」必要がある。具体的には、スクラップすることを強く意識して教育課程を精選し、十分な授業時数を確保している。また、短時間学習を教育課程に組み込んで木曜日を全校５校時とし、研修や教材研究の時間に充てている。さらに、部活動の時間削減にも取り組んでいる。

⑵若年層を含めた人材育成

人材育成は、本校においても急務であると実感している。若年層研修では、学習指導や生徒指導、保護者対応、円滑に校務分掌を遂行する学校参画など教員としての基礎を学ぶ機会としてチーム大平で支えている。また、未来を担うミドルリーダーの育成や様々なノウハウをもったベテラン層の意欲向上を図るために、「大平小を支えるボトムアップ型プロジェクト」を立ち上げた。本校の課題への取組を提案し、協議のうえ共通実践するものである。校内での日常的なＯＪＴを通じた学びの中で「人は育つ」と考え、試行している。

⑶家庭・地域を巻き込んだ学校づくり

本校では、改めて地域密着型の学校にしようと行事や各教科において活用できるように再改革を進めている。また、学年だよりに「学校への要望」を記す欄を設け、家庭・地域の思いを大切にした学校づくりに努めている。

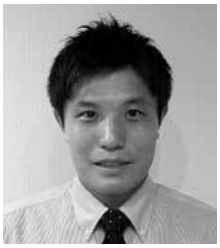
３　教務主任として意識していること

管理職と教職員の間に教務主任が太いパイプでつながることが信頼関係を維持し、安定した学校になると考える。そのために、「①どんな相談にも傾聴し、複数の回答をもつ②頼まれた仕事はすぐに実行する③その日の仕事を翌日に回さない④誰とでも笑顔で接し、職員室文化を創造する⑤誰よりも働く⑥教務主任が何とかしてくれるという安心感を与える」ことを意識して、信頼関係を築いている。

４　おわりに

10年前や10年後と比較しても「今」の学校は全く違う状況にある。「今」に関して言えば、一人の素晴らしい先生を作り出すのではなく、チームとしての組織的な対応が求められる。つまり、共通理解と共通実践ができる環境を整えなければならない。私は不易流行を念頭において、古きよきものは残し、新しい情報をキャッチしてスピード感のある改革を進めていきたい。そして、教職員が主体的に活躍できる学校が未来の子供を育てると信じ、日々の教育活動に邁進していきたい。

学校は楽しいところだ！



流山市立流山小学校教諭　藪田（やぶた）　高光（たかみつ）

私の目標は、子供たちが「学校は楽しい！」と思える瞬間を多くつくることである。初任者研修では、そのために必要なことをいろいろと学ぶことができた。

その中でも特に印象に残っているのは、特別支援学校での実践研修と不登校についての研修である。特別支援学校では、朝から子供と一緒に走って汗を流し、音楽発表会の練習にも参加した。発表会練習で、それぞれが担当の楽器を繰り返し練習してきた成果が、合奏にも表れているのを感じた。不登校については、未然に防ぐことの大切さを改めて実感した。子供たちが毎日元気に登校するためにはどうすればよいか、考えさせられた。

このような経験を通して、私は、子供たち一人一人の居場所をつくることが「学校は楽しい！」と感じることに不可欠だと気付いた。そのためには、子供と過ごす中で、それぞれの個性を理解し、活躍の場を作ることが担任としてまずできることだと思い、常に学級経営で意識している。子供たちが「できるようになった！」と喜んでいる姿を見ると、教員という仕事の素晴らしさややりがいを感じる。

これからも、周りの先生方から数多くのことを学びながら、「学校が楽しい！」と子供たちが感じる瞬間を増やし、自分も成長していきたい。

子供の成長を感じられる毎日

浦安市立高洲中学校教諭　宇佐見（うさみ）　恵理（えり）

教員となって２年目を迎え、第２学年の担任として子供たちの成長を感じながら充実した毎日を送っている。

先日、林間学校で茨城県笠間市を訪れた。そこでの民家体験や飯盒炊さんでのカレー作り、稲刈り体験などを通して、子供たちのいつもと違う表情をたくさん見ることができた。どの班も仲間と力を合わせながら、去年の校外学習よりも美味しいカレーを作ったり、宿泊先でとても丁寧に布団を畳んだりする姿に、１年間の成長を感じ、本当に嬉しかった。初任者であった昨年度は、学級経営や部活動、教材研究、校務分掌など仕事量の多さに驚いたが、今では生徒と一緒に過ごす時間が一番楽しく、人を成長させることができるこの仕事に就けたことに幸せを感じている。

初任者研修で学んだことは、「子供たちと向き合い、共に成長していくことの大切さ」である。まだまだ指導力が足りず、日々悩むことも、先輩教員に助けられることも多いが、叱るときはしっかりと叱り、褒めるときは褒める、感謝の気持ちを伝える時は心から伝えることを大切にしていきたい。

また、研修の場で同期の仲間と情報を交換したり、悩みを共有したりしたことで、気持ちを前向きにすることができ、教員同士の繋がりの大切さを感じた。学年や学校の枠を超えた、多くの先生方との関わりや連携の中で、周りの先生方の良いところを吸収しながら成長していきたい。

これからも目の前にいる生徒とまっすぐに向き合い、共に歩みながら、精進していける教員であり続けたい。

学びを深める対話活動の充実を目指して
～チームで作る授業～

四街道市立四街道中学校教諭　中村（なかむら）　圭吾（けいご）

１　はじめに

本校では、「自ら課題をもち、思いや考えを伝え合い、深めることができる生徒の育成」を研究主題とし、全教科、全職員で主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んでいる。社会科部会では、「チーム四街道中社会科」として一丸となって「学びを深める対話活動の充実」を図っている。

２　主体的な学びの実現のために

⑴授業展開サイクルの確立

本校社会科では、すべての教員が「学習課題の把握」→「予想」→「自分なりに調べる・考える」→「グループで共有・検討する」→「全体で整理・分類する」→「まとめる」のサイクルを基本に実践している。これにより、生徒は学習の見通しを持って、より主体的に学習に取り組むことができている。

⑵ＩＣＴの活用

学習内容への興味・関心を高めるために、動画などの視聴覚教材を積極的に導入している。特に、NHK for school（Webサイト）に用意されている、学習指導要領に対応したクリップ動画を授業に取り入れている。

動画等は、授業のまとめの際に学習内容の振り返りとして視聴させるだけでなく、授業の導入時にも活用する。これにより学習内容を大まかにつかみ、学習の見通しを持てるようにしている。生徒にとっては、「より詳しく知りたい、調べたい。」といった動機付けにつながっている。

⑶目的ある学習活動

授業の中では、「調べる」「グループで話し合う」などの活動がある。活動ありきの展開では主体的な学習になりにくい。そこで、それぞれの学習活動を「何のために行うのか」を明確にして行っている。

例えば調べる活動では、「調査内容を分かりやすく他に説明する」ことを目標に調査をさせる。生徒は、あとで話しやすいように工夫してノートにまとめたり、語句の意味をよく調べたりするようになる。

目的の明確化により学習活動に必然性が生まれ、より主体的な学びにつながるものと考える。

３　対話的な学びの実現のために

⑴インプット・アウトプットの原則

対話は、考えを広げ深める効果があるとともに「生きて働く知識・技能」の獲得にも効果があると考えている。そこで、授業の中では、調べる活動（インプット）の後に必ず調べた内容を他者に伝える活動（アウトプット）を行っている。

調査の中で出てきた重要語句などを用いて自分なりに説明することにより、単なる言葉ではなく生きた知識として生徒の中に定着していくと考える。

⑵弾力的グループサイズ

学習活動の目的によって、グループサイズを変えている。学習課題に対する予想を考えた後は、隣同士ペアで意見交換を行う。多く

の情報を比較検討、分類整理し、発表資料を作成する際には４～６人のグループで行う。このように、グループの全員が対話に参加できるよう心掛けている。

⑶ゴール設定型対話活動

話し合い活動を活性化させるためには、対話する必然性のある課題設定が必要である。そこで、「発表会に向けて準備をする」「意見を分類整理してまとめる」などのゴールを設定して活動を行う。そうすることで、生徒たちは、進んで対話しながら役割を分担したり、自分の意見や調査内容を他者のものと比較しながら、共通点などを見出したりする活動に取り組めている。

⑷対話重視型単元構成

各グループが異なる視点で調べ話し合って発表準備をする。さらに発表、質疑応答を行い、多面的、多角的に課題解決するといった、対話重視の単元構成に挑戦している。

（例）地理的分野「九州地方」の学習

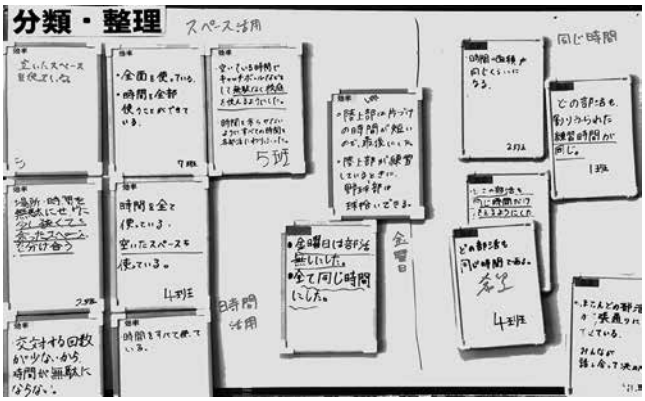
第１次	①自然環境の特色 ②人口や産業の特色 ③自然災害の特色 ④環境保全の取組の四つの視点を提示。 どのグループがどの視点で調べるか分担。 ◎調査、発表資料作成
第２次	◎発表資料作成 ◎グループ別発表会
第3，4次	◎グループ別発表会

※◎は対話の場面

４　深い学びの実現のために

⑴分類整理コーナー

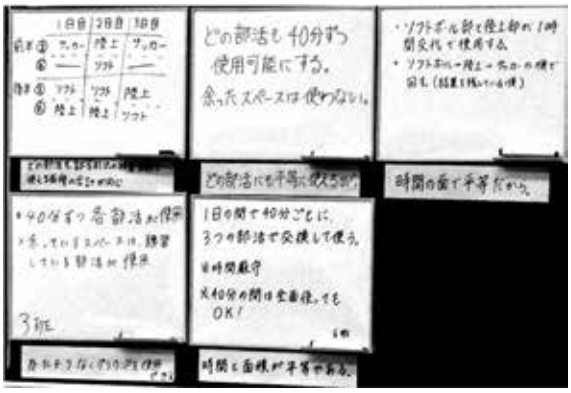
黒板とは別に大型ホワイトボード上に「分類整理コーナー」を設け、各グループで調べた事柄や、まとめた意見を視覚的に分類整理できるようにしている。これにより「物事の関連性や特色を見出す」などの社会的な見方・考え方を働かせた活動を教室全体で共有できる。



分類整理コーナー

⑵短冊型思考ツール

グループ内の話し合いであがった意見を、全体で比較検討する際には、小さめの短冊型ホワイトボードを活用している。黒板上での操作が容易となり、効率的に分類整理を行うことができる。



短冊形思考ツール（細長いボード）

５　おわりに

以上の実践は、本校社会科の先生方のアイデアの結晶であり、一人の力では成しえないものである。全職員が同じ方向性で、良いアイデアを共有しながら授業改善に取り組める点が、本校の授業づくりの何よりの特色である。今後も主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に、チーム一丸となって励んでいきたい。

教室と社会を接続する
～社会的合意形成を目指す社会問題学習～

県立流山おおたかの森高等学校教諭　山本（やまもと）　晴久（はるひさ）

１　はじめに

「となりの人とペアをつくろう。じゃんけんをして勝った人が、前回の授業でやった○○について相手に説明してください。ではスタート！」、「４人組をつくって、相談しながらこの問題を解いてみよう」…

この仕事に就いて30年近く。体力の衰えやシワの数だけでなく、授業の様子もずいぶん変わったものだ。それなりに工夫もしてきたつもりではあるが、一方的に自分の言いたいことを伝えるだけの授業も多かったように思う。冒頭に挙げたものは単なる形式にすぎないが、本稿では授業づくりの視点について、私が迷い考えながら実践してきたことについて述べてみたい。

２　二項対立

30代の半ば、採用２校目でのちょっとショッキングな出来事である。ある卒業生が遊びに来た際、彼は当時話題となっていたーしかし､私にとっては相容れないー本を差し出し、「先生もこういう本を読んで勉強した方がいいよ」と言った。在学中の彼を含め、手はかかったが素直な生徒たちであったので、私が熱く主張をすると反応も良く共鳴してくれているように見え､「いい授業だったなー」とその気になっていた。

今思えば、例えは悪いが、私の授業は彼らの頬をひっぱたくようなものであったのだろう。そうなると、逆の立場の人が反対側から同じことをすれば簡単にその向きが変わってしまう、つまり、自分の頭で考えたどり着いた答えでなければダメなのだな、ということにようやく気付かされたのであった。

それからは、当時流行し始めていたディベートに力を入れるようになった。死刑制度や生命倫理など、社会的に賛否が分かれるテーマを探しては実践を繰り返した。二項対立がはっきりしており、観客（ディベーター以外の生徒）の投票で勝ち負けが決まるディベートは、単純で分かりやすく、今も使う手法である。

３　意思決定から合意形成へ

⑴開発教育

３校目の職場に移り、専門科目である地理を担当することになった（初任、２校目は公民科目を担当)。そこでは､「世界貿易ゲーム」をはじめとする開発教育のシミュレーション、ロールプレイング等のアクティビティー教材の活用を試みたが、忙しさにかまけて市販のワークシートを使っても上手くいくはずがなかった。

⑵大学院休職

そんなこともあり、担任２周りを終えた40代半ばに思い切って仕事を休み、大学院へ通うことにした。私が利用した「大学院修学休業制度（無給)」では、いわゆる長研とは異なり、正規の大学院生として授業に出席し単位を取得することで、修士（教職課程を履修す

れば専修免許）資格を取ることができる。

海外巡検や学会、研究会などで様々な場所を訪れ、多くの方々と話をすることができた。特に、小中学校の先生方が自分の足で稼いだ地域の社会問題について、子供たちが調べ学習や話し合いを重ねて課題解決に向かう様子に触れたことは、これまでの授業を問い直す貴重な機会となった。

⑶「コンセンサス会議」

大学院に通い始める直前の３月に東日本大震災が発生した。当時、首都圏にも降り注いだ放射性物質による低線量被ばくの危険性については専門家の間でも意見が分かれ、様々な言説が飛び交っていた。修士論文では、このことをテーマとして授業を構想し、その実践から分析までを書いた。

その際に参考としたのが、専門家間でも意見が分かれる問題について市民同士で討議を行うための手法の一つ、「コンセンサス会議」である。無作為抽出で選ばれた市民が、複数の専門家からの説明と質疑応答を材料として、市民のみの話し合いで社会的合意形成を図るというものだが、現在も私が授業を構想する際には、これをベースとしている。

４　授業をつくる

内容だけでなく、時数や評価の問題など改善すべき点は多々あるが、具体的な授業づくりの視点について以下に述べる。

⑴社会問題学習

実在の社会問題をテーマとすることである。生徒たちの生活や地域に身近な問題で、授業者自身が事前に調査・研究を行っていることが望ましいと考える。これまでに、地域の放射能問題、遺伝子組み換え作物の安全性、学校周辺の開発問題などを扱った。

⑵専門家

賛否が分かれるテーマを扱うので、両方の立場の専門家をお招きしたい。専門家といっても研究者だけでなく、地域の課題解決にあたるNPOの方なども含まれる。生徒にとって、親と教員以外の大人と出会うことには大きな意味があると思う。

⑶話し合い

授業における生徒たちは、コンセンサス会議における「様々な立場の市民」であり、クラスという偶然の集団で毎日を過ごす様は、まさに社会の縮図である。ただ、社会問題について話をする機会などほとんど持たない彼らに「討論しなさい」と言っても難しいので、多少の仕掛けが必要となる。

まず、テーマについて自分自身の立場を決めさせ、次に同じ立場の者同士でグループをつくり意見を出し合い、より強く多面的な根拠を持たせる。そして、様々な立場の者が集まるようにグループを再編成し、合意形成に臨ませる。これらの過程においては、話し合いがスムーズに進行できるよう、あらかじめ決められた役割に基づいて発言をする「ロールプレイ」、いくつかの政策・解決案などを合意によって順位付けする「ランキング」などの手法を重ねて用いることも多い。

５　おわりに

前述のように、ディベートには単純でわかりやすいという利点があるが、最後まで二項対立の世界で話が続く。現実の社会においても、互いにかみ合わない二項対立が事態を悪化させている事例が多いように思う。

今後解決すべき課題は山積し、広く社会に開かれた社会参画や合意形成がますます求められている。自らの主張をしつつ相手の意見も丁寧に聞き、粘り強く合意に向けた努力ができる、そんな力を身に付けられる授業を目指したいと考えている。